三 沢 古 賀 遺 跡 4

―福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査報告―

小郡市文化財調査報告書第３０４集

2016

小郡市教育委員会

序　文

本書は、小郡市三沢における宅地造成に先立って、小郡市教育委員会が平成26年度に実施した三沢古賀遺跡4の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

今回の発掘調査では、自然流路跡を利用して掘削された大規模な溝が確認され、当時の土地利用のあり方を知ることができました。この調査成果が歴史資料として活用され、さらなる文化財保護への理解の向上に役立つことを願っております。埋蔵文化財は、地域の歴史を明らかにする上で欠かすことの出来ない貴重な文化遺産です。本書が文化財に対するご理解、さらには教育及び学術研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆さま、西日本鉄道株式会社、発掘作業に従事された方がたに深く感謝を申し上げます。

平成28年3月30日

小郡市教育委員会
教育長　清武　輝

例　言

1．本書は、西日本鉄道株式会社による宅地造成に伴い、小郡市教育委員会が平成26年度に実施した三沢古賀遺跡4の発掘調査記録である。
2．三沢古賀遺跡4の発掘調査は、小郡市三沢地内の開発申請に伴い、小郡市三沢4005-1、4146-1、4147、4148の2,900㎡において遺構を確認し、調査を実施した。
3．遺構の実測については、龍孝明が行ない、製図は宮崎美穂子が行なった。
4．遺構全体図の作成および地形測量は　株式会社埋蔵文化財サポートに委託した。
5．遺構の写真は龍が、空中写真は有限会社空中写真企画が、遺物写真はシステム・レコが撮影した。
6．本書で使用する遺構の略号は以下を用いて表示している。
　ＳＫ：土壙・土壙状遺構、ＳＤ：溝・自然流路跡
7．遺構図中の方位は座標北を示し、全体図中の座標は世界測地系第Ⅱ系による。
8．遺物、実測図、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
9．本書の執筆は龍が行なった。

目次

第１章　調査の経過と組織…… 1
　１．調査の経過
　２．組織
第２章　位置と環境…… 2
第３章　遺跡の概要…… 7
　１．遺構の内容
　２．調査区の概要
第４章　遺構と遺物…… 7
　１．溝・自然流路跡
　２．土壙・土壙状遺構
　３．ピット
　４．包含層・表採遺物
第５章　調査の成果……15

挿図

第１図　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）…… 3
第２図　調査区配置図（S=1/2,500）…… 4
第３図　三沢古賀遺跡４遺構配置図（S=1/300）……5・6
第４図　土層断面図１（S=1/60）…… 9
第５図　土層断面図２（S=1/60）……10
第６図　SK01・02・09 実測図（S=1/60）……11
第７図　流路跡推定図（S=1/1,250）……16

図版

図版１
１．Ａ区北半全景（上空から）
２．Ａ区南半・Ｂ区全景（上空から）

図版２
１．三沢古賀遺跡４（上空から花立山を望む）
２．三沢古賀遺跡４　出土遺物

図版３
１．SD01・02　A-A′ トレンチ完掘状況（北から）
２．SD01・02 A-A′ トレンチ土層（北東から）
３．SD01・02 C-C′ トレンチ完掘状況（北から）
４．SD03 D-D′ トレンチ完掘状況（北東から）
５．SD04 F-F′ トレンチ土層（南から）
６．SD04 G-G′ トレンチ土層（北西から）

図版４
１．SD05 H-H′ トレンチ土層（北東から）
２．SD05 I-I′ トレンチ土層（北東から）
３．SK02 完掘状況（東から）
４．SK03 土層（南西から）
５．SK09 土層（北西から）
６．SK09 土層（南東から）

第１章　調査の経過と組織

１．調査の経過

三沢古賀遺跡４の発掘調査は、平成 25 年 12 月 11 日付けで西日本鉄道株式会社より埋蔵文化財の有無の照会（審査番号 13099）が提出されたことを端緒とする。対象地は面積 27,166㎡におよぶ広大な敷地である。これを受けて、小郡市教育委員会は平成 25 年 12 月 16、17 日の両日に試掘調査を実施し、対象地内に希薄ではあるが遺構が確認された。この結果に基づいて小郡市教育委員会と西日本鉄道株式会社とで協議を実施。対象地のうち遺構が存在すると考えられる 2,900㎡について発掘調査を実施することで合意を得た。

平成 26 年７月３日　調査区冠水状況（南西から）

以下、調査の経過を調査日誌より抜粋して記す。

５月 12 日：重機搬入。13 日：表土剥ぎ開始。14 日：表土剥ぎと並行して遺構掘削開始。15 日：調査箇所について再度協議を行なう。20 日：地境について、現地協議を行なう。境界杭の再設定を依頼。29 日：A 区北半の空撮を実施。

６月２日：A 区北半の埋戻しを開始。A 区南半の調査に移行。23 日：調査区冠水。

７月３日：豪雨により調査区が冠水。長崎県、佐賀県鳥栖市で記録的な豪雨。４日：排水作業。11 日：排水作業再開。調査区壁面の一部をバックホーで掘削し、水路へ排水。B 区表土剥ぎ開始。

８月１日：降雨により、調査区が冠水。４日：中学生４名の職場体験受け入れを予定していたが、雨天中止。５日：排水作業。発電機故障。７日：作業再開。調査区各所で壁面崩落。午後からは崩落した土砂の除去を実施した。９、10 日：接近した台風による降雨で壁面の一部が崩落。11 日：崩落した土砂の撤去作業。13 日：土層断面図作成。業務委託による全体図作成開始。14 日：降雨。作業中止。18 日：排水作業。22 日：空撮予定。調査区冠水のため延期。27 日：空撮を実施。28 日：道具撤収。実測作業。

９月１日：埋戻し開始　３日：道具洗い。現場終了。

なお、調査完了後、小郡市教育委員会において調査成果の検討を行なったところ、隣接地に遺跡範囲が拡大する可能性が出てきた。そのため、9 月 19 日に西日本鉄道株式会社と協議を実施。平成 26 年 10 月６日～ 15 日にかけて、試掘調査を実施した。

調査は、重機により４本の試掘トレンチを掘削し、遺跡の拡がりを確認した。耕作土直下に地山を検出しており、上面は耕作により削平されている。遺構としては自然流路を検出したが、人為的な掘り込み等は確認できなかった。出土遺物は自然流路下層の砂層中から数点出土している。流れ込みによるものと考えられる。

２．組織

三沢古賀遺跡４の調査体制は以下のとおり。

【平成 26 年度】

小郡市教育委員会	教育長	清武　輝
	教育部長	佐藤秀行
文化財課	課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	技師	龍 孝明

【平成 27 年度】

小郡市教育委員会	教育長	清武　輝
	教育部長	佐藤秀行
文化財課	課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	技師	龍 孝明

第２章　位置と環境

小郡市は福岡県中部に位置し、西側は佐賀県鳥栖市、基山町に接する。小郡市内中央部を宝満川が南北に貫流しており、宝満川左岸の朝倉山塊の末端である花立山（標高 130.6 m）が市内唯一の高所となっている。市北部は脊振山系から派生する低丘陵地帯となっており、三国丘陵と呼ばれる。市南部は三国丘陵と花立山の下位に位置する低段丘地帯を経て、高度を下げながら平野部へいたる。

三沢古賀遺跡は、南西方向へと緩やかに傾斜する三国丘陵の南端部に位置し、周囲は宝満川によって形成された沖積低地が広がっている。この丘陵は南北に長い楕円形を呈しており、三沢古賀遺跡のほか、三国小学校遺跡、みくに保育所遺跡が立地する。丘陵の南斜面には竈門神社が鎮座する。

三沢古賀遺跡４の北側に隣接して、三沢古賀遺跡３の調査が平成 12 年度に実施されており、縄文時代と考えられる落とし穴状遺構、弥生時代前期の土壙、貯蔵穴のほか、14 世紀中頃から 15 世紀代にかけての地下式坑が検出されている。

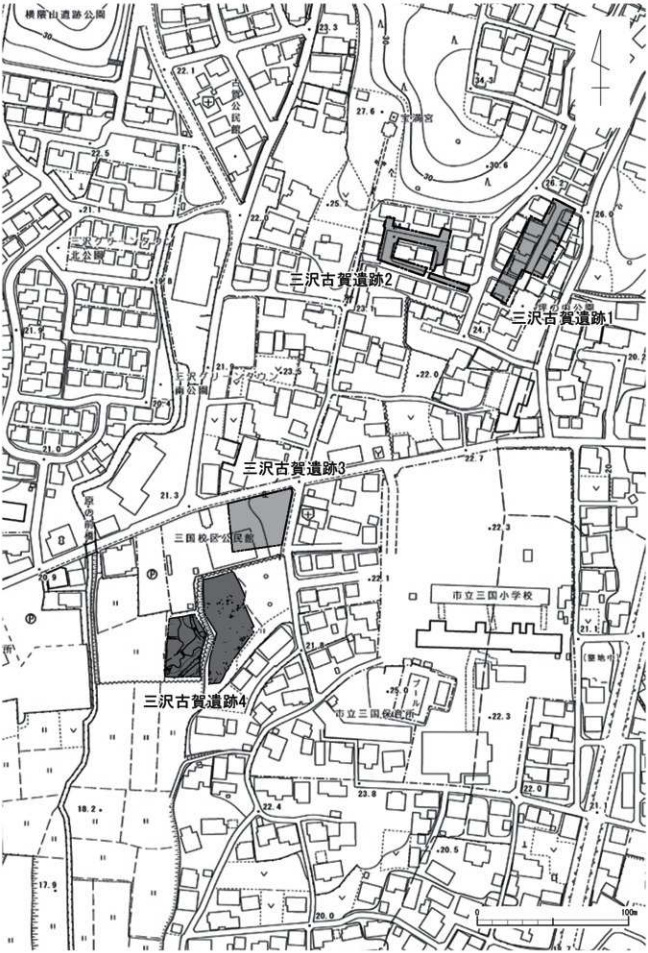
三沢古賀遺跡３次調査や三国保育所内遺跡１次調査で弥生時代前期の貯蔵穴が検出されており、丘陵端部における集落の展開がこの時期から始まったようである。前期末から中期後葉にかけては集落の展開は衰退し、再び集落の展開が見られるのは中期末から後期初頭にかけてとなる。竪穴住居跡を中心として円形周溝状遺構などで、環濠と考えられる溝も検出されている。この集落も長くは営まれず、再び丘陵上に集落が展開するのは後期中頃以降である。三国保育所遺跡１号住居跡からは、舶載方格規矩鏡の破鏡が出土していることは注目される。

中世の発掘調査例は少ないものの、宝満川右岸の中位段丘上、左岸の低位段丘上に集落が展開するようである。周辺では三沢古賀遺跡１・２、力武宮脇遺跡などが挙げられる。三沢古賀遺跡１次調査区では、13 世紀代の土壙、土壙墓、溝が検出され、土師器皿、陶器擂鉢、輸入青磁などが出土している。３次調査では 14 世紀中頃から 15 世紀代にかけての地下式坑が検出されている。

この遺跡の東側には横隈宿があり、丘陵を挟んで街道筋が南北に通っている。この横隈宿は、延宝２年（1674）に松崎街道が開通して以降、次第に衰微することとなった。現在は本陣の面影はまったく見られないが、北側入り口の桝方は往時の姿を良好に留めている。

《参考文献》
三国小学校遺跡「三国小学校遺跡」1981 小郡市文化財調査報告書第 10 集
三国小学校遺跡２「三国小学校遺跡Ⅱ 吹上赤土遺跡」1987 小郡市文化財調査報告書第 36 集
三国小学校遺跡３「埋蔵文化財調査報告書１」1997　小郡市文化財調査報告書第 115 集
三国保育所内遺跡「みくに保育所内遺跡 吹上・北畠遺跡」1981 小郡市文化財調査報告書第８集
三国保育所内遺跡２「埋蔵文化財調査報告書１」1997　小郡市文化財調査報告書第 115 集
三沢古賀遺跡「三沢・古賀遺跡」1982 小郡市文化財調査報告書第 12 集
三沢古賀遺跡２区「三沢古賀遺跡２区」1999 小郡市文化財調査報告書第 131 集
三沢古賀遺跡３「三沢古賀遺跡３」2002 小郡市文化財調査報告書第 165 集

第1図　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）



第２図　調査区配置図（S=1/2,500）

第３章　調査の概要

１．調査区の概要

本調査区における遺構検出面は、標高 18.7 m から 20.0 m を測り、周辺道路面より１～３m ほど低くなっている。調査区は、中央部で検出された自然流路へと南北から緩やかに傾斜する谷状の地形となる。調査区は農業用水路で分断されていたほか、廃土置場の関係から水路の東側をＡ区、西側をＢ区と分割して調査を行った。調査地点は耕作地として利用されていた経緯もあり、Ａ区北半では、耕作に伴う撹乱のほかは遺構が見られなかった。

２．遺構の内容

Ａ･Ｂ区ともに遺構密度は僅少であり、明確な遺構としては土壙２基、溝５条、自然流路２条、ピット 31 基を検出したほかは、土壙状遺構８基、耕作に伴う溝、撹乱である。調査区中央部の低い地点を東西方向にＳ字状に蛇行して流れる自然流路跡は、その流路跡を利用して２条の溝が掘削されている。土壙状遺構はその形状、埋土の堆積状況、検出位置から地形の窪地である可能性が高い。撹乱からは陶磁器や瓦など近現代の遺物が出土しているが、Ａ・Ｂ区ともに遺構からの出土遺物はほとんど見られなかった。調査区全体において遺構埋土の上層は黒色粘土が堆積しており、遺物は全てこの黒色粘土中から出土している。

第４章　遺構と遺物

１．溝・自然流路跡

SD01

検出された溝は、時間的な制約からトレンチ調査とした。土層からは浅い谷状地形を流れていた自然流路跡を利用して SD02 を掘削、この SD02 埋没後、並行するように SD01 を掘削していたことが明らかとなった。以下、各トレンチの状況を述べる。なお、度重なる降雨によって、トレンチの崩落が相次いだため、a、ｃトレンチは、土層確認、実測ともにできていない。出土遺物は、いずれも最上層の黒色粘土から出土している。

ｂトレンチ（A-A’）

第１層から 12 層が SD01 に該当する。遺構検出面から深さ 1.02m、幅 4.6 m、溝底面の標高は 18.33m を測る。南壁の一部にオーバーハングがみられることから、当時の喫水線を示すものと考えられる。第５層は地山ブロックを含んでおり、壁面の崩落土と考えられる。第 12 層は地山ブロックをわずかに含む淡褐色砂質土で壁面の崩落に伴う堆積と考えられる。

ｄトレンチ（B-B’）

崩落のため、一部実測不可。南側は深くなっているが、崩落の危険があったため未完掘である。第４層から 18 層、22 層が SD01 に該当すると考えられる。

ｅトレンチ（C-C’）

SD02、自然流路を切る。遺構検出面から深さ 0.9m、現況幅 2.97 m、溝底面の標高は 18.7 m を測る。埋土は自然堆積であるが、やや水平気味に堆積する。第１層から第 10 層が該当する。

ｆトレンチ

未完掘。SD03 を切る。

SD02

ａトレンチ

崩落のため土層確認、実測ともにできていない。

ｂトレンチ

SD01 に切られ、自然流路を切る。遺構検出面から深さ 1.10 m、幅は現況で 2.3 m、溝底面の

標高は 18.3 mを測る。

第 13 層から 19 層までが該当する。いずれも自然堆積である。第 13 層下の第 14 層から切り込む植物に起因すると考えられる攪乱がみられることから、14 層堆積後 13 層が堆積するまでやや期間があったものと考えられる。

cトレンチ

崩落のため土層確認、実測ともにできていない。SD01 から大きく離れ、南側に屈曲する。

dトレンチ（B-B'）

第 1 層から 3 層が SD02 に対応すると考えられるが、崩落のため詳細は明らかでない。

eトレンチ（C-C'）

SD01 に切られ、自然流路を切る。遺構検出面から深さ 0.64m、現況幅 2.56 m、溝底面の標高は 18.9 mを測る。土層からは自然流路埋没後にほぼ同一箇所に溝を掘削しているものと考えられる。第 11 層から 24 層が該当する。

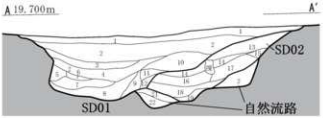
fトレンチ

未完掘。SD01・02 と SD03 との切りあい関係を確認する目的で調査を行なった。切りあい関係はやや不明瞭ながら、SD03 が切られている。

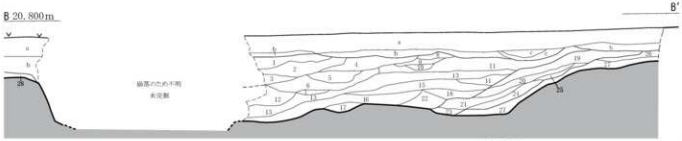
SD01・02 ともに断面形はU字型を呈している。深さは遺構検出面から 0.6 ～ 1.1 m前後を測り、溝底面の標高は 18.3 ～ 18.9 mを測る。SD01 は幅 2.96 ～ 4.54 mを測る。

埋土は最上面が黒色粘質土であり、この土層中からのみ出土遺物が見られる。黒色粘土より下層は、湿地帯の堆積土のような非常に粘性の強い黒色粘土、黒色砂の互層堆積となっているが、土色・土質にほとんど差はみとめられず、比較的短期間に埋没していった様子が伺える。下層には灰白色土から暗灰色土の砂層がみとめられ、最下層には鉄分の沈着による暗黄褐色砂が堆積しており、部分的ではあるが小礫がみとめられる点から溝として利用されていた時期には、流水があったものと考えられる。その下からはグライ化した明灰緑色の花崗岩ばいらん土が検出された。

SD01・02 ともに出土遺物は皆無であり、最上層の黒色粘質土中のみ弥生時代中期から中世にかけての幅広い時期の遺物が混入する。そのため、各溝の時期は不明であるが、先に SD02 が掘削され、埋没後には、並行するように SD01 が掘削されている。A 区中央付近の cトレンチでは両溝が大きく分離して流れる様子がうかがえる。中層では灰色粘土の堆積がみられた。最下層は同色の砂質土であるほか、自然地形も南北からこの溝に向かって大きく傾斜しており、本来は自然流路であったものを掘削して、溝とした可能性がある。

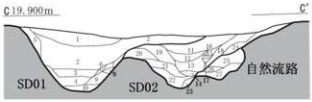


1 暗灰黒色粘土
(遺物をわずかに含む)
2 黒色粘土
3 灰黒色粘土
4 灰黒色砂混じり粘土
5 黒色粘土に地山ブロック混じる
(壁面崩落土)
6 暗灰黒色粘土
7 灰黒色粘土
8 暗灰色粘質土
9 暗灰黒色粘質土
10 暗灰黒色粘土
11 淡褐色砂質土
12 淡褐色砂質土
13 暗灰色粘質土
14 暗灰色粘質土 (鉄分を含む)
15 暗黄褐色砂
16 暗灰色粘土
17 灰色粘土 (鉄分を含む)
18 暗灰色粘質土
19 暗灰色砂混じり粘質土
20 灰褐色砂質土
21 黒色粘土
22 暗褐色砂



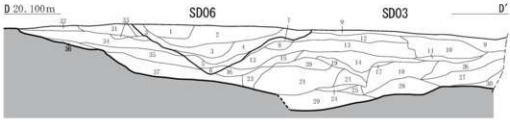
a 現代耕作土
b 床土
c 攪乱

1 灰黒色土、黒色土の混土層
2 灰色土 (鉄分の浸透あり)
3 暗灰色土
4 淡灰黒色粗砂
5 灰黒色細砂 16層ブロックをやや多く含む)
6 暗灰色粘土 (鉄分浸透、黄褐色土ブロックを含む)
7 暗灰色粘土 (明灰色土ブロックを含む)
8 灰色砂質土
9 暗灰黒色砂質土
10 灰黒砂質土
11 黒色粘土
12 黒色粘土 (木片を多く含む)
13 灰黒色粘土
14 黒色砂質土
15 黒色粘土
16 暗灰黒色粘質土
17 淡灰色砂 (グライ化土ブロックを多く含む)
18 暗灰色粘土
19 暗灰黒色粘土
20 暗灰黄色粘土
21 暗灰色粘土
22 暗灰白色粘質土 (砂粒を含む)
23 灰色粗砂
24 暗灰色粘質土
25 暗灰黄色砂質土
26 暗灰色粘質土
27 淡灰黒色粘質土
28 暗灰黒色粘土



1 暗灰黒色粘土
2 黒色粘土
3 淡灰黒色砂質土
4 灰黒色砂
5 灰黒色粘土
6 暗灰黒色粘土
7 明灰色粘土
8 暗灰色粘土
9 暗灰黒色砂質土
10 暗黄褐色粗砂
11 暗灰黒色粘土
12 暗灰黒色粘土 (黄褐色砂を含む)
13 灰黒色砂
14 灰黒色粗砂
15 淡灰黒色砂質土
16 灰色砂
17 灰黒色粘質土
18 灰黒色粘土
19 灰黒色粘質土 (17層に似る)
20 暗灰白色粘土
21 灰黒色粘土と黄褐色砂の互和堆積
22 暗灰黄色粗砂
23 灰褐色粗砂
24 暗灰白色粘土 (19層より明るい)
25 灰黒色粘土
26 暗黄褐色粗砂
27 灰黒色粘土と灰白色粗砂の互和

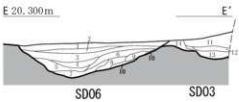
第４図　SD01・02 土層断面実測図（S=1/60）



SD04

1 黒灰黄色細砂
2 淡灰黒色粘土
3 灰黒色粘土
4 暗灰色粘質土（砂を多く含む）
5 暗灰黒色粘土
6 灰黒色粘土
7 暗灰黒色粘土
8 灰黒色粘土
9 暗灰色粘土
10 暗灰色粘土（9層より明るい、鉄分含む）
11 暗灰色粘土＋灰白色粘土
12 濃灰色粘土
13 灰白色粘土
14 暗灰黒色土＋淡灰褐色土＋淡灰色土
15 灰褐色シルト
16 淡青灰色砂質土
17 暗灰色粘質土
18 灰黒色粘質土＋灰褐色粘質土
19 暗灰黄色粘質土
20 灰黄色粘質土
21 淡灰黒色粘土（23層と似る）
22 淡灰色粘土（鉄分含む）
23 淡灰黒色粘土
24 暗赤褐色粘質土
25 灰色粘土（砂を含む）
26 明灰色粘土（鉄分含む）
27 暗褐色粘質土
28 暗褐色粗砂＋灰色粗砂
29 暗灰色砂質土（粘土混ざる）、常に湧水
30 暗青灰色粘土
31 暗灰黒色粘土
32 灰黒色粘土
33 31層、34層の混層
34 濃灰褐色粘土
35 灰緑色砂質土（一部グライ化）
36 灰褐色粘質土
37 灰緑色シルト（一部グライ化）

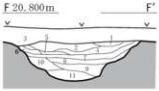
0 2m



SD04

1 暗灰黒色粘土
2 灰褐色砂質土
3 灰黒色細砂
4 灰色細砂（鉄分含む）
5 灰白色粘土と黒色粘土の混層
6 暗灰色粘土（鉄分含む）
7 灰色細砂（鉄分を少し含む）
8 暗灰褐色砂質土
9 暗灰色微砂
10 灰黒色土粘土
11 黒色粘土
12 暗灰黒色細砂
13 暗灰黒色粘土
14 淡灰黒色粘質土

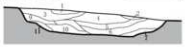
SD04



1 灰黒色粘土質と灰褐色粘質土
2 灰褐色細砂
3 明黄褐色粘質土と淡灰色粘質土
4 灰色粘質土
5 灰黒色粘土
6 淡灰黒色粘土
7 暗灰色砂質土（赤褐色粘土塊をやや多く含む）
8 灰黒色粘土と粗砂
9 灰黒色粘砂＋暗黄褐色粗砂（粘土塊を多く含む）
10 暗褐色粗砂
11 濃赤褐色粗砂（粘土塊を多く含む）

1 灰黒色砂質土（黄褐色粘土ブロックを含む）
2 灰黒色砂（黄褐色粘土ブロックを含む）
3 暗灰黒色粘質土
4 暗灰黒色粘土
5 4層と同じ
6 暗灰黒色粘質土
7 暗灰黒色粗砂
8 灰黒色粘質土

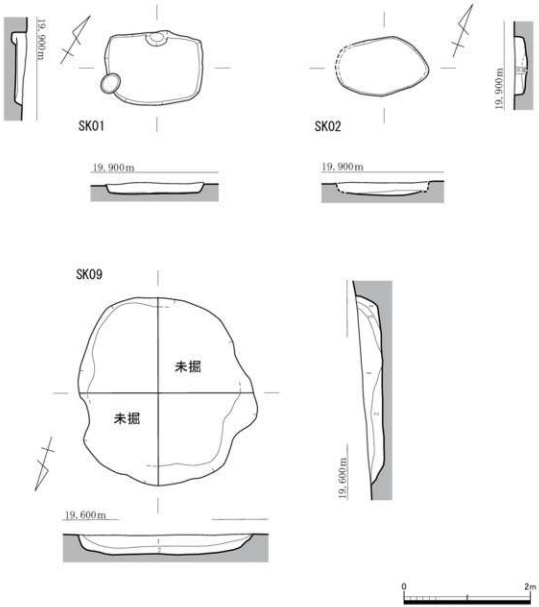
SD05



1 暗黄褐色砂
2 灰色粘質土
3 暗灰黒色粘質土
4 灰黒色砂
5 暗灰色粘質土（鉄分比較あり）
6 黒色粘質土（灰黄色粘土ブロックを少し含む）
7 灰褐色砂（赤褐色粘土塊を含む）
8 灰褐色砂
9 灰黒色砂質土
10 灰黒色粘質土
11 暗灰黒色砂

1 灰黒色粘質土
2 灰黒色粘質土（赤褐色粘土ブロックを含む）
3 暗灰黒色砂質土（赤褐色粘土ブロックを含む）
4 灰黒色粘質土、淡灰黒色砂の互層層
5 灰色微砂
6 黄褐色砂
7 黒色粘土
8 黒色粘土
9 5層に似る（赤褐色粘土ブロックをやや多く含む）

第５図　SD03 ～ 06 土層断面実測図（S=1/60）



第6図　SK01・02・09 実測図（S=1/60）

SD03

B 区西端を南北方向に流れる自然流路跡である。西側は調査区外へとつづくため、詳細な規模は不明であるが、追加して実施した試掘調査の結果から幅 10.2m から 25.0 m を測る。SD06 に切られる。

土層には不整合なラインが多く、部分的ながらグライ化したブロックが堆積している状況が見られることから、人為的に埋められたものと考えられる。上層の第 7 層から第 13 層は粘土質であるが、下層は砂層とシルトの堆積で常に湧水する。

出土遺物は見られなかった。

SD04

B区北端から西側へわずかに屈曲しながらのびる溝である。SD01・02を切る。幅は1.8から3.0mを測る。2箇所のトレンチ調査としている。埋土の状況からSD05と同一の遺構と考えられる。

aトレンチ（F-F'）は、幅1.95m、検出面からの深さ0.48mで、溝底面の標高は約19.72m、bトレンチ（G-G'）は、幅1.87m、検出面からの深さ0.41mで、溝底面の標高は約19.73mを測る。断面形はやや段がつくが、緩やかなU字形を呈する。埋土は砂、粘土の互層堆積で埋土中に赤褐色もしくは黄褐色を呈する粘土塊が多く混入する。

出土遺物は、検出面で袋状口縁壺1点、トレンチ内最上層から須恵器甕の胴体片が出土したのみである。いずれも流れ込みによるものと考えられる。遺構の帰属時期については、判断が難しいが、埋土の状況からは比較的新しく、近代以降の耕作に伴う水路と考えられる。

SD05

B区南東端で検出された溝で調査区南から北東方向へ直線的にのびる。埋土の堆積状況は各トレンチで異なるが、埋土の様子、規模からSD04、05は同一遺構と考えられる。本来は、現在の用水路付近で大きく屈曲していたものと考えられる。

aトレンチ（H-H'）は、幅2.34mで検出面からの深さ0.45m。溝底面の標高は19.76m、bトレンチ（I-I'）は、幅2.75mで検出面からの深さ0.39mで溝底面の標高は19.51mである。

出土遺物は見られなかった。

SD06

SD03自然流路跡を切る溝である。断面形は角度の浅いV字形を呈しており、現況で幅2.38から2.84m、深さ0.54から0.76mを測る。遺構検出時には部分的に砂層が露出している状況が見られたが、平面プランは不明瞭で明らかに出来ていない。調査区全体を覆う黒色粘土を上から切っていることから、近・現代の新しい溝と考えられる。

出土遺物は見られなかった。

自然流路跡

A区、B区を東西に大きく蛇行しながら流れる自然流路跡である。SD01、02に切られ、本来の規模は明らかではない。検出面では大きく黒色土が広がっており、平面ではSD01、02との差を確認できなかった。遺構検出面から深さ0.84m、流路底面の標高は18.75mを測る。

A-A'トレンチでは第20層と21から22層、B-B'トレンチでは第19から27層、C-C'トレンチでは第25から27層が該当する。C-C'トレンチでは北側壁面の一部がオーバーハングしており、当時の喫水線を示すものと考えられる。

これら溝および自然流路の切りあい関係は、まず、谷部に存在していた自然流路埋没後、谷地形を呈していた自然流路跡にSD02が掘削される。SD02埋没後、並行して南側にSD01が掘削されている。SD01・02は調査区西側を流れていた自然流路SD03を切っており、この時点でSD03は埋没していたものと考えられる。本来はSD03に自然流路が合流していたものと推測され、三沢古賀遺跡は両自然流路に挟まれた微高地上に立地していたと考えられる。

2．土壙

本調査区では2基の土壙と8基の土壙状遺構が検出された。土壙として調査したものはSK01、SK09の2基で、残りの8基はプランが明瞭ではなく、遺存状態が悪いことから土壙状遺構として調査を実施した。これら土壙状遺構は、自然流路もしくは溝による浸食、または窪地の可能性がある。

SK01

調査区東部中央付近で検出された土壙は長軸 1.52m、短軸 1.14 m の平面プラン隅丸長方形で、上面には灰黒色土、下層に地山によく似た明黄褐色粘質土が堆積していた。上層からわずかに土器片が出土しているが、いずれもローリングを受けた小片で図示に耐えなかった。

SK02（図版４－３）

A 区北半で検出された土壙状遺構である。平面プランは楕円形状を呈し、長軸長 1.48 m、短軸長 0.92 m を測る。倒木痕の可能性があるが、遺存状態が悪く、詳細は不明である。

出土遺物なし。

SK03（図版４－４）

A 区南半の自然流路跡南側に隣接して検出された不定形の土壙状遺構である。埋土は自然堆積を示しているが、非常に浅く、平面プランも不明瞭であることから、自然流路の浸食による窪地の堆積と考えられる。

出土遺物なし。

SK04

SK03 と同様の窪地と考えられ、SK04 と一部が繋がっているが、切りあい関係は不明であった。平面プランは非常に不明瞭である。自然流路の浸食によって SK03 と繋がったものと考えられる。

出土遺物なし。

SK05

SK03、04 と同様、平面プランは不整形で浅く、自然堆積であり、自然流路の浸食による窪地と考えられる。

出土遺物なし。

SK06

自然流路跡南側で検出された土壙状遺構で自然流路跡を切る。平面プランはやや不整形な楕円形を呈し、長軸長 1.26 m、短軸長 1.08 m を測る。埋土は単純埋土であった。

出土遺物なし。

SK07

SK06 と同様、自然流路を切る土壙状遺構である。平面プランは楕円形状を呈し、長軸長 1.63 m、短軸長 1.07 m を測る。埋土は黄褐色土ブロックをわずかに含む暗褐色土の単純埋土である。

出土遺物なし。

SK08

SK06 に近接して検出された土壙状遺構で平面プランは楕円形状を呈す。長軸長 0.83 m、短軸長 0.63 m を測る。埋土は上層が黒色粘土、下層は暗褐色砂質土の２層からなる自然堆積である。

出土遺物なし。

SK09（図版４－５、６）

A 区南半で検出されたやや大型の土壙である。平面プランはやや不整形な円形を呈し、南北 2.96m、東西 2.78m を測る。断面形は船底状を呈し、検出面からの深さは 30cm を測る。住居跡の可能性も検討したが主柱穴や炉跡、周壁溝、貼床等は確認できなかった。埋土は自然堆積である。第１層は黒色粘土、第２層は灰黒色粘質土であり、溝と同様の堆積土である。

出土遺物なし。

SK10

調査区南西端で検出された平面プラン不整形の土壙状遺構である。一部調査区外へとつづくため、規模は不明である。ピットの切りあいもしくは攪乱の可能性がある。

出土遺物なし。

3．ピット

検出されたピットの総数は31基を数えるが、並びを持つものはなく、出土遺物も見られない。いずれも浅く、柱痕も確認できなかった。埋土の様子からピットとしたが、耕作に伴う攪乱の可能性も考えられる。詳細は不明である。

4．包含層・表採遺物

前述のように調査区全体は黒色粘土に覆われており、遺構埋土の上層はこの黒色粘土の堆積が見られる。遺物は全てこの黒色粘土中からの出土である。出土遺物のほとんどはローリングを受けているため､図示に耐えないものが多かった。出土遺物については写真図版を参照いただきたい。いずれも周辺遺跡で確認されている弥生時代前期、13世紀から15世紀代の遺物の流れ込みと考えられる。縄文時代の遺物は確認できなかった。

出土遺物（図版２－２）

１、２は甕の口縁部、３は甕の底部である。４は袋状口縁壺の口縁部である。器壁には赤色顔料が塗布されている。１から４はいずれも弥生時代中期末から後期初頭頃の所産。５は表土剥ぎ時に表採した陶器擂鉢である。器壁は露胎しており、素焼きであった可能性がある。内面には３条１単位の櫛目が施される。６は石斧で片側は欠損する。

第４章　調査の成果

本調査区は、周辺道路面より１から3mほど低くなっており、調査前は耕作地として利用されていたため、削平され平坦面をなしていた。A区北半では、土壙１基、土壙状遺構１基、ピット31基を検出したほかは、図示していないが、耕作に伴う溝、撹乱が検出されたのみである。今回の調査では、周辺で確認されている集落に関連する遺構は確認されなかった。遺構検出面は削平を受けているが、北側隣接地の３次調査で検出されている地下式坑の遺構規模・深さから考えると、削平され失われたのではなく、元から存在しなかったと考えられる。３次調査区南側で検出された南落込付近から南側は、遺構密度が希薄になっている点から、三沢古賀遺跡の集落域南限を示すものと考えられる。

A区北半を除くと調査区は旧地形が良好に残っており、微高地に挟まれた谷状地形となっていることがわかる。今回の調査区は谷地形へと落ち込む緩傾斜地にあたる。

調査区を東西方向に蛇行する溝および自然流路は、表土剥ぎ時には周辺地形から谷部と考えていたが、傾斜が急であったことと、反対側ですぐに地山の立ち上がりが確認されたため、溝と判断し調査を行なった。粘土層と砂層の間からは常に湧水がみとめられる。溝底面はグライ化した明青白色砂質土であり、上面は粘性の非常に高い黒色粘土が厚く堆積している。堆積土から、沼や湿地に起因する堆積と考えられる。

このSD01・02および自然流路跡は、最下層に礫混じりの粗砂層が部分的に堆積していることが明らかとなった。この溝が本来自然流路であったことを示している。谷地形となっている当該地を流れていた自然流路跡の谷地形を利用し、溝SD01を掘削、埋没後に再度溝SD02を掘削している。埋土はいずれも粘土を主体としており、出土遺物もほとんど見られないことから、比較的早い段階で一気に埋没したものと考えられる。再度掘削された溝SD02も同様の粘土が堆積し、埋没している。

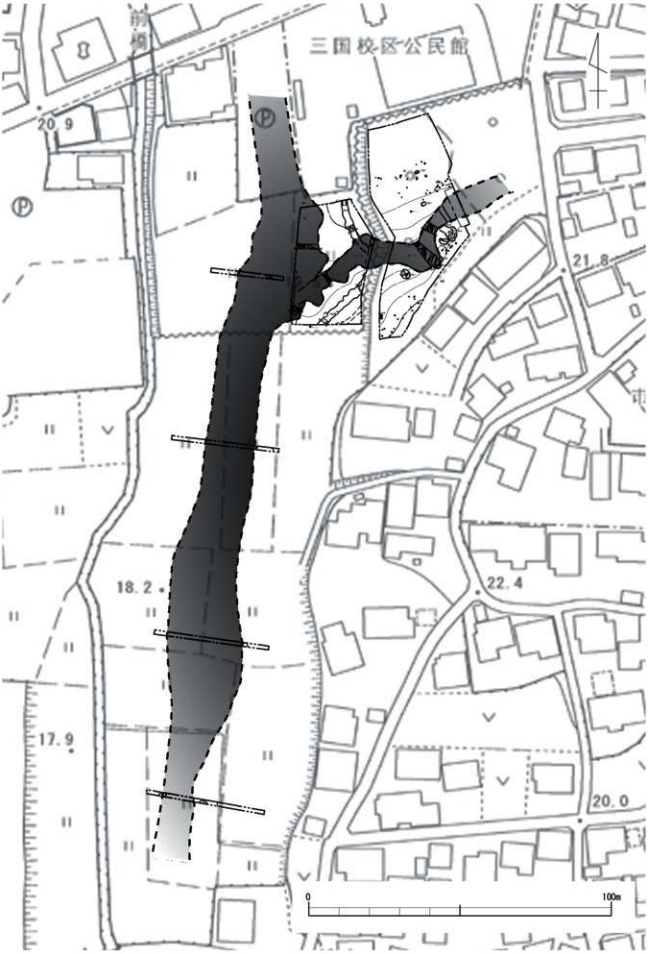
調査前に実施した試掘調査によって、調査範囲内の大半に自然流路跡が検出されていた。今回の調査によって、この自然流路跡がSD03の延長上にあたること、さらに自然流路跡を利用した溝SD01、02が検出されたことから、SD03の延長上にも人為的な掘削が行なわれていた可能性を考慮し、調査完了後に改めて試掘調査を実施した。この試掘調査では４本のトレンチを掘削し、自然流路の規模と方向を確認している。人為的な掘り込み等は確認できず、出土遺物はほとんどみられなかった。地形等を考慮すると、谷地形を流れる自然流路と考えられる。これによって、自然流路跡SD03が南北方向に貫流していることが明らかとなった。試掘調査結果をもとにして、この自然流路の流れを推定したものを第７図に示す。

このような谷部を流れる自然流路に近接して立地する集落遺跡では、谷部を流れる自然流路を利用し、自然流路へと繋がる堰を伴う溝の開削や灌漑施設の構築など、弥生時代以降、微高地上の水田耕作に利用される例が多く見られることから、本調査時にも木器や木製品の出土が期待された。

本調査区西端には、南北に流れる自然流路跡（SD03）が検出されており、調査区南西端付近が溝と自然流路の合流点と考えられる。本調査区の溝埋土である黒色粘土中には樹皮の残る自然木などが良好に遺存していたものの、木製品などは出土しなかった。自然流路および自然流路跡を利用した溝において水利、治水施設の構築等はなかったものと考えられる。このことは、溝および自然流路跡の土層から、掘削後、比較的短期間に埋没したと考えられる点からも施設の構築には向かない地勢であったと想定される。

三沢古賀遺跡１次調査区と２次調査区の間は湿地であったことがこれまでの調査で明らかとなっている。遺跡の立地する丘陵の裾部は沼沢が広がっていたと考えられており、２次調査区の南東部では地形が大きく落ち込み、湿地になっていた痕跡が確認されている。今回の調査で見られた溝最上層に厚く堆積している黒色粘土は、この湿地に由来する有機堆積物の可能性がある。

調査区の位置する「古賀」の地名は、空き地を開拓した「空閑」の意とされ（市史第三巻p.737）、そのほか周囲には「原前」、「前沢」、「沼尻」などの小字名がみられ、周辺には湿地帯が広がっていたことが想定される。



第７図　流路跡推定図（S=1/1,250）

溝の時期について

今回検出された溝（SD01・02）および自然流路が利用された時期であるが、出土遺物が少なく、時期の決定が困難である。溝からの出土遺物は、最上層の黒色粘土層に限定しており、少量ではあるが弥生時代および中世から近世にかけての出土遺物が見られる。検出段階では近世の磁器がわずかにみられる。ほとんどはローリングを受けていることから、いずれも最終埋没段階での流れ込みである。溝の使用時期を示すものではない。下層からの出土遺物は見られない。最終埋没段階の時期は中世以降、近代以前であろう。遺構に伴う出土遺物は認められないため、溝および自然流路が機能していた時期は不明である。

出土遺物の時期を詳細に見ていくと、主体となるのは弥生時代中期末から後期初頭にかけてのものである。中世のものは数が少なく、時期の決め手に欠けるが13～15世紀代となろうか。これらは、北側に位置する三沢古賀遺跡、南東の三国小学校遺跡、三国保育所遺跡の出土遺物と時期が重なることから、これら周辺集落遺跡からの流れ込みによるものと考えられる。

溝の利用時期は明らかにできていないものの、埋没時期は出土遺物から近世以降と考えられる。明治22年に作成された地籍図には当該地に河川や水路、溝が確認できないことから、近世に掘削され、近代に入る頃には埋没していたものと考えられる。広い時期幅しか与えられなかった。

溝の性格

周辺で確認されている溝および関連遺構として、三沢古賀遺跡２次調査では、重機による掘削のみであるが、深さ28ｍを測る池が検出されている。堆積土の状況など類似点は多いものの、地形からは、連続するものとは考えにくく、現段階での関連性は不明である。三国小学校遺跡３次調査では、東西方向に延びる溝（SD4）が検出されているが、規模が異なるためこちらも関連性は不明である。周辺遺跡の調査で検出された溝は多いものの、いずれも規模や方向が異なっており関連性は見られない。

規模の近いものでは五ヶ山網取遺跡の中世区画溝などが挙げられる。
また、この溝の位置はほぼ小字境に位置していることから、この溝を境に小字境が設定された可能性が考えられる。

前述のように今回の調査で検出された流路跡は自然流路であることから、本来は字境となった自然流路であったものと考えられる。流路跡に沿って直線ではない溝が掘られている点は、自然流路埋没時に字境を定めるために再度掘り直しが行なわれ、字境を示したものと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	みつさわこがいせき４
書名	三沢古賀遺跡４
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第３０４集
編著者名	龍孝明
編集機関	小郡市教育委員会
所在地	〒838-0198　福岡県小郡市小郡255-１　℡0942-72-2111
発行年月日	2016（平成28）年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みつさわこがいせき４	おごおりしみつさわ　こが	40216		33°25′25″	130°33′46″	2014.05.13 ～ 2014.09.10	2,900㎡	宅地造成
三沢古賀遺跡４	福岡県小郡市三沢字古賀							

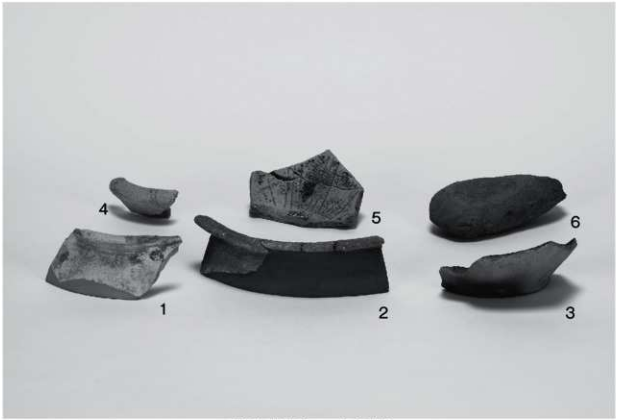
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三沢古賀遺跡４	集落跡 散布地	弥生 中世 近世	土坑、溝	弥生土器、陶磁器	

要約	４次調査では時期不明の土壙、溝、自然流路跡を検出した。溝のうち２条は、中世以降の自然流路跡を利用して掘削したものである。中世以降、近代以前と考えられ、時期は明らかでないが、大規模な治水工事が行なわれていたと考えられる。 なお、３次調査で確認された集落関連遺構が検出されなかったことから、三沢古賀遺跡の集落南限が特定された。

A区北半全景（上空から）

A区南半・B区全景（上空から）

三沢古賀遺跡４（上空から花立山を望む）



三沢古賀遺跡４　出土遺物

SD01・02　A-A'　トレンチ完掘状況（北から）

SD01・02　A-A'　トレンチ土層（北東から）

SD01・02　C-C'　トレンチ完掘状況（北から）

SD03　D-D'　トレンチ完掘状況（北東から）

SD04　F-F'　トレンチ土層（南から）

SD04　G-G'　トレンチ土層（北西から）

図版 4

SD05　H-H′ トレンチ土層（北東から）

SD05　I-I′ トレンチ土層（北東から）

SK02　完掘状況（東から）

SK03　土層（南西から）

SK09　土層（北西から）

SK09　土層（南東から）

三沢古賀遺跡４

小郡市埋蔵文化財調査報告書　第304集

平成28年３月30日

編集　小郡市教育委員会
　　福岡県小郡市小郡255-1
発行　片山印刷有限会社
　　福岡県小郡市祇園１丁目8-15